

2. ウクライナ避難者による意見提示

発題①

ベルナツカ・ユリヤ **Julia Bernatska**

(代読者：オレーナ・ソボル **Olena Sobol**、
日本YMCA同盟コーディネーター)

こんにちは。皆さんにお目にかかる光栄です。2022年4月に避難してきたベルナツカ・ユリアです。ウクライナにいたときから、オンラインでアメリカのITビジネスを経営し、日本では大手IT企業で専門分野の仕事もしています。また、ウクライナ難民の支援として、再資格取得プログラムの実施やIT職種での就労支援にも携わっています。

一年前、私はここで、避難してきたウクライナ人にもつわる問題と、それを解決する方法について話しました。この一年間、私たちは多くのことをなし遂げてきました。今日は、私たちの成果とこれからの計画、将来への希望を分かち合いたいと思います。

去年、特に二つの重要な問題を提起しました。そのうちの一つが短期滞在ビザの課題と就業のための集中的な日本語学習の必要性です。これは今回、法改正があり補完的保護制度によって、最長5年間のビザ、日本語学習機会も提供されることになりました。この制度は私たちの期待を上回るもので、実現のために努力を払ってくださったすべての方々に、深い敬意と謝意を表したいと思います。

昨年、もう一つ提起した重要なテーマは、ウクライナ避難民の再就職の問題です。新しいITの専門性を身につける再訓練プロジェクトを提供をできなか。日本で将来の生活が描けるような仕事を見つけてほしい。この再訓練プロジェクトは、その後、YMCAとアメリカのトレーニングセンターBIJBの支援のおかげで、実際に実現することができました。

私たちはまず、日本の労働市場を研究し、実際に雇用に繋がるように研修コースを作りました。30人

以上のウクライナ人女性が週3回オンラインでの夜間開催、2ヶ月間にわたる研修コースを受けました。コース終了後、約20%の女性受講生がウクライナやヨーロッパ諸国でリモートワークの仕事を見つけ、日本のIT企業で新しい専門分野の仕事に就きました。

ある女性学生の例についてご紹介します。彼女はトレーニングコースを修了し、新しいIT専門スキル「Power BI Analyst」を取得しました。トレーニングでは、実践的な課題を含む幅広い教材を提供し、最後には実際のデータに基づいて論文を作成します。実際、彼女たちはミニ・プロジェクトを行います。このコースで得た知識は、日本のIT企業の実技を見る面接に合格するのに大変に役立ちます。

私たちは、就職活動や面接の各段階の準備も手伝いました。履歴書が正しく書けるようにサポートし、模擬面接を実施し、メンタルなサポートも行いました。彼女たちは「自分達は日本企業に理解されず、採用されないかもしれない」と恐れているので、このメンタルなサポートは欠かせません。私たちとしては、彼女たちを単なるかわいそうなウクライナ避難民としてではなく、日本のビジネスに利益をもたらすスペシャリストとして見てもらう、そのことが重要なです。彼女は日本の大手IT企業に就職することができました。これは、彼女が自分の住居を借り、経済的に自立し、ITスペシャリストとして自己実現できることを意味します。キャリアと経済的な成長の見通しが立つこと、これから必要になることはこれです。

このプロジェクトは、今後も継続し、拡大していく予定です。

発題②

ウリバチョバ・イリーナ **Iryna Hrybachova**

私の名前はイリーナ・グリバチョワです。ウクライナの弁護士で、法学博士です。2022年に来日し、

8月から姉のテティアナ・ゴンチャレンコと一緒に、法律法人キャストグローバルグループで働き始めました。代表の村尾氏が、ウクライナ人を支援するプロジェクトを立ち上げ、私たちは日本の弁護士と協力して、避難者の無料相談やその他の法律サービスを提供しています。1年半の間に100件以上の相談を行いました。ビザや移住手続き、住居に関する問題、日本政府が受け入れた「身寄りのない避難民」の居住地等に関する相談です。

仕事に就いた避難者の中には、労働権の侵害に直面している人もいます。ウクライナ人は、自分でビジネスを始めること、ボランティア活動や税制に関する問題にも興味を持っています。保証人との関係が悪化した結果、一部のウクライナ人は困難な状況に直面し、保証人をあきらめるか、新しい保証人を探すしかないといったこともあります。

さて、昨年、私はこの場で、ウクライナから避難した人々に、一年のみの活動制限付きの短期ビザ（特定活動ビザ）が発行されていることに言及し、ビザが延長されるかどうか分からぬまま、新しい国で安定した生活を計画するのは非常に難しいということを話しました。今年、その状況が改善されました。日本政府により新たに補完的保護制度が導入され、最長5年間の安定した在留資格が得られ、特定の活動には制限がありますが、日本への出入国も可能です。長期滞在ビザを取得したウクライナ人は、自信をつけて、将来の計画を立て、自分と子供たちのために安定した生活をイメージしていくことができます。

また定住支援プログラムも導入され、日本語教育と生活ガイダンスが無償提供されます。生活費の一部、住居費手当か宿泊施設の提供、医療費等も支援されます。ただし、この支援を受けるためには一年（オンライン）または半年（対面）の教育コースを修了することが条件になっており、注意が必要です。また、日本財団から支援を受けている避難民は、定住支援プログラムの財政支援の両方を受ける

ことはできません。運用はこれからまだ成果や課題は十分にはわかりませんが、政府によって定住に向けた問題は解決に向かっている、と暫定的には言うことができると思います。

もう一つの問題は、雇用に関するものです。ウクライナ人は、本国での経験、知識、およびスキルを活かすことができる質の高い仕事を積極的に探しています。日本で充実した生活を送り、自己実現するには、日本語の十分な能力がなければならないことを理解しています。多くのウクライナ人がさまざまな学習プログラムを活用し、日本語を積極的に学んでいます。英語と日本語に堪能なウクライナ人の中には、すでにキャリアを活かせる興味の持てる仕事を見つけ、専門家として活躍している人もいます。一部の日本企業もウクライナ人の雇用を支援しています。その他、英語力のみでもウクライナ人が日本企業に採用された例は一定数聞いています。

発題③

ユリヤ・ベルナツカ Julia Bernatska

今年は多くのことが行われましたが、まだまだ取り組むべき問題があります。私が注目したい二つの主な課題は、資格の検証、動機付けプログラム、再資格取得コースの拡大です。

私たちが直面する主な問題のひとつは「恐れ・不安・心配」です。日本企業に就職することへの不安。失敗するかもしれない、就職できても役に立たず首になるのではないか。これらは心理的な問題であり、解決ができます。

日本企業で働くにはどうしたらいいか、面接に合格するにはどうしたらいいか、就職して最初の数ヶ月はどうしたらいいかなど、彼女たちが自分の力を信じ、日本でキャリアを築くための決定的な一步を踏み出すのに役立つ多くのことを伝えることが大切です。

また、新たな専門分野のトレーニング・プログラムも開催する予定です。昨年はデータ・アナリストになるためのプログラムを立ち上げ、成果を出しましたが、今年は日本で需要のある他のいくつかの職種のトレーニングを追加する予定です。例えば、日本企業で外国人専門家を雇用できるスペシャリストを養成する「ITリクルーター」や、ウェブ開発者です。

カナダの移民向け適応プログラムについて調べたとき、カナダの卒業証書認定制度がとても気に入りました。その人のもともとの専門分野にもよりますが、一定の条件を満たせば、平均して2週間から6カ月で卒業資格が認定されます。高度専門人材に門戸を開き、積極的に誘致している日本にとっても関連があるかもしれません

例えば、カナダでの中等教育修了後の学位確認と博士号認定の手続きには平均2週間かかります。その後、カナダ市民と同様に大学の空席に応募することができます。

電気技師は6ヶ月の資格取得が必要で、その間に電気技師のヘルパーとしての訓練を受け、カナダの電気網の詳細を学び、必要な資格試験に合格します。その後、電気技師の免許を取得し、カナダで電気技師として働くことができます。同じように、法律の学位を確認し、弁護士免許を取得することが可能です。つまり、専門性を活かしながら、より早く自立に向けて進むことができ、お金を稼いで税金を払い始めることができます。

日本のビジネス界に専門家を取り込むという問題は、日本政府による包括的なアプローチと一定の措置が必要な深刻な問題であることは承知しています。私としては、効果的かつ前向きな協力ができるよう全力を尽くすつもりです。ありがとうございました。

発題④

ウリバチョバ・イリーナ Iryna Hrybachova

ウクライナ人はボランティア活動に積極的に参加し、日本でウクライナ文化を広め、ウクライナと日本の絆を築くプロジェクトにも参加しています。キャストグローバルのウェブサイトでウクライナの法律や経済に関する問題を取り上げる機会があります。ウクライナの歴史的な憲法行為を分析することで、ウクライナがヨーロッパの国家であること、ウクライナの立憲主義と国家の形成が18世紀にはすでに行われていたことを日本社会に伝えたいと考えています。しかし、ロシアは3世紀にわたってウクライナを占領し、ロシア文化とロシア語を押し付け、ウクライナをソビエト連邦を含むさまざまな連合に加盟させました。これについて詳しくは、以下のウェブサイトで日本語で読むことができます：

<https://castglobalgroup.com/ukraine/>

日本の芦原一郎弁護士と共同で、ウクライナの企業組織に関する記事を日本の法律雑誌『ビジネス・ロー・レビュー』（4月号）に寄稿しました（4月号）。この記事の内容を元に、私は日本経済連合（経団連）で「ウクライナにおける投資の展望と起業の基礎」をテーマにセミナーを開催しました。現在、ウクライナは非常に困難な軍事状況にあります。

それにもかかわらず、国の経済は機能しており、迅速な回復が可能です。すべての政府機関が稼働しています。イノベーション活動やIT分野が急速に発展しています。日本を含む世界の多くの国々が、ウクライナ経済への投資に関心を寄せています。このため、今年の2月には多くのウクライナの政府、自治体、企業の代表団が日本を訪れ、パートナーシップ関係を構築しました。また、2月19日にはウクライナの経済発展と復興に関する大規模な会議が開催され、50以上の協力覚書が署名されました。

もう一つの問題は、ウクライナの若者が日本で学び、高等教育を受けることの問題です。適応の問題、十分なレベルの言語知識の欠如、教材の習得の難しさなどにより、ウクライナの子供たちは日本の学校での教育を望まず、ウクライナの学校でオンライン教育を受け続ける状況を作り出しています。高校や大学に進学するには非常に優れた日本語力と知識が必要であり、さらに競争の激しい入学試験に合格する必要があります。しかし、残念ながらそれがうまくいく人は少ないです。適応の問題やコミュニケーションの困難さ、十分な勉強ができないといった問題から、ウクライナの10代の若者たちは危険を顧みずに故郷に帰り、ウクライナで教育を受けるという状況を作り出しています。しかし、肯定的な事例もあります。高校で勉強する代わりに、一部の若者は語学学校に通って積極的に日本語を学び、ウクライナでのオンライン学習を続けながら、英語も同時に学んでいます。その後、日本の高等教育機関に進学し、英語または日本語で学んでいます。ハルキウ出身の女性が法学部の研究生として入学し、日本語で勉強した後、修士課程に進学して日本で法学位を取得することを目指している例があります。他にも、ウクライナ人学生が日本の高等教育機関で学んでいる例はたくさんあります。したがって、ウクライナ人は積極的に適応・統合し、日本とウクライナ社会の利益のために積極的に働く意欲があります。

ご清聴ありがとうございました。

司会者：横山）

イリーナさん、ユリヤさん、代読者のオレーナさん、ありがとうございました。

お二人には昨年に引き続いだ、ご登壇を頂きました。まずは、有言実行、昨年提案されたことを自らも動いて実現し、成果を出されていること、もう一つは日本に住むウクライナ避難者だけでなく、本国はじめ世界中のウクライナ避難者や、日本で暮らす外国人、日本人のことも視野に入れて動いておられ

る点、改めて敬服します。また、今回も中長期的な避難を視野に貴重なご提言をいただきました。

お二人に拍手をお願いします。

では、続きまして、4名の方に登壇をいただき、フロアセッション「各世代が自ら語る”いま””これから”」に移ります。

フロアセッション：

各世代が自ら語る”いま””これから”



一人目：M・Zさん

身寄りのない避難民として夫婦で日本政府の支援により来日。コンビニエンスストア等で働くが、言語及びビジネススキルを身に着け生活基盤の安定化に向けて努力を続け、現在はフルタイムで勤務。男性避難者が直面する孤立感にも向き合いながら、妻の専門性（プラネタリウム解説員）を活かしたキャリア実現も支える。

の方々などがとても親身に支えてくれました。特に日本政府の財政的支援は大きいです。



司会者：横山）まずはMさんから、特に日本に来てからの就労、どのようにして仕事を探し、何に苦労したか、いまどのようにフルタイムで働いているか聞かせてください。

M・Z：私はMです。日本に避難して間もなく二年になります。この間、私たち夫婦がどうやって生活してきたかをお話します。来日するまで、日本語はもちろん日本のこと何も知らずに、知人一人いませんでした。なので、何から、どう始めればいいかわからずに日本に着きましたが、その瞬間から今日まで、本当に多くのボランティアや支援団体、自治体

数ヶ月たったときに仕事をしようとして、言葉もまだほとんどできない状態でしたが、「コンビニはどうか」と応募し、採用されて働き始めました。しかしやはり、日本語をもっとちゃんと勉強しないと日本で自分たちで生活していく仕事、いい仕事には就けないと思い、いったん辞めました。「いまはまずは日本語学習に集中しよう」と妻と話し合いました。そのとき、YMCAから東京都（産業労働局）が行う就業のための日本語教育コースの紹介を受け、日本語学校に通いました。妻はオンラインで自分の専門性に関係する日本語も勉強できる形態を選び、二人別々ですが助け合いました。私の日本語学

校のコースは6ヶ月で就労のサポートもあり、並行して仕事を探しました。

それで卒業後は、日本の自動車部品工場に勤めることになりました。100人ほどの同僚がいますが、ウクライナ人は私一人、いや、外国人が私一人でした。それから警戒されているような感じがして、最初は「独りぼっち」と思う時がありました。それで、「ここはやっぱり、私から動き出さない」と・・・と気持ちを切り替えるようになり、話しかけることで、共通の話題などもだんだん見つかるようになりました。いまでは同僚と仲良くしています。仕事探しも、日本の職場で働くことも、何をかも新しい経験です。大変ですが、（就労には）自分や周りと向き合うことが大切です。皆さんもきっとそういう努力をされていると思います。避難者一人一人が、自分にあった仕事を見つけ、働くことを願っています。

二人目：O・Bさん

ザポリージャ出身。20年以上、麻酔医として博士号を持ち、医療に従事。家族3人で来日。滞在が長期化する可能性を見据え、都が実施するビジネス日本語と就業スキル向上の講座を受講。夫の健康状態が思わしくなく、娘がまだ中学生であり一家を経済的に支えていく覚悟だが、医師、あるいは医療に携わる仕事も諦めていない。

O・B：私たち家族はザポリージャから来ました。家族で日本に行くなんて本当に戦争前は考えてもみませんでした。私には家族、専門性のある仕事、親戚、友人、全部ウクライナにあり、外国に行く必要はありませんでした。麻酔医の資格を持ち20年間、医療の現場、そして最近ではザポリージャ大学で教鞭もとっていました。しかし戦争によって、国に残って爆撃下で生活を送るか、国境を越えてどこかに避難するかを迫られました。そのようなとき、

YMCAの来日渡航支援を知り、日本に家族で避難することになりました。

日本に避難して、少ししてから子どもの英会話教室の講師の仕事をハローワークで見つけました。この子どもを相手とする英語の先生であっても、私には日本語が必要だと痛感しました。それで、いったん仕事を減らして日本語学校に通い、勉強に集中することにし、無事に卒業できました。



しかし、当然ですが、私は麻酔医として日本で働くことはできません。医師の国家資格（ライセンス）はもちろん、専門用語も含めたプロフェッショナルな日本語が必要で、それを目指すことは大変なチャレンジです。それをわかったうえで諦めずに日本語を勉強しながら、新しい仕事を探しています。私たち3人の家族を支えるためです。いま隣にいる娘が高校受験のまっただなかですが、高等教育への進学は避難民にとって最も難しい問題の一つです。帰国について、皆さんがいままだ曖昧な考えであることは先ほどのアンケートでもわかりました。しかし私たちの故郷はザポリージャで、ヨーロッパでもっとも大きい原子力発電所から30キロのところで、いつロシアからの攻撃があるかわからないところです。なので、ちゃんと仕事をみつけ、生活に慣れるようにならなければいけないと思っています。日本と皆さんにもう一度ありがとうございます。

三人目：A・Bさん

ザポリージャ出身。地元の中学校に通学しながらNGOが運営する日本学習コースにも通う。さらにウ

クライナの学校の電子メールで送られてくる課題もこなす。日本のアニメーションをこよなく愛し、地元のママさんバレーボールにも所属。まだ将来のことは考えられないと語る。

A・B：緊張しているのでスマホの原稿を見ながらお話しします。私はいま16歳で、日本の中学3年生です。私は3つの学校に通っています。日本の中学校、日本語教室、ウクライナのオンラインスクールです。日本では高校生の年齢ですが日本語のレベルが足りないこと、義務教育ではないことなどから入れず、中学校に通い、いまちょうど高校受験を迎えていました。残念ながら（在京外国人枠の入学試験に）落ちてしまったのですが、あきらめずに、来年もう1回チャレンジしたいと考えています。いま一番大切なことは高校に入ることですが、勉強以外の時間も大切にしています。



ふり返ってみれば、日本に来てすぐ中学校に入ればよかったと思ったりもします。それでも日本に来てからの一年半には、忘れられない想い出がたくさんあります。みんなが応援してくれ、学校にも友だちがたくさんでき、学校や日本語教室の先生まで親しい友人のように感じます。最初は確かに、お互いに様子見というか仲間に入れない感じがしました。しかし時間が解決しました。私は戦争前はバレーボールを、優秀な選手として6年間続けていました。けれど私が日本で通っている中学校にはバレーボール部がなかったのでがっかりしていたら、昭島市の方が、参加できるママさんバレーボールチーム

を探して来て紹介してくれました。年齢は上の方が多いため、自分の得意なことが生かせることはとても楽しいです。

もともとアニメも漫画も大好きだったので、コレクションしています。フィギュアも集めています。ウクライナにいるときは、あまりときめくということはなかったのですが、日本にいると「生きている」という感じがとても強いです。日本にいることをとてもうれしく思っています。「自分の家にいる」という気持ちを持っています。この2年で（戦争への）怖い気持ちを越えて、生きることができるようになりました。皆さんに感謝します。「毎日、生きて、忘れられない思い出をつくること」をこれからも続けます。

四人目：R・Tさん

キーウ出身。17歳で来日して現在19歳。ウクライナでの高校卒業を目前にリトアニアを経て日本に単身で避難。将来の夢は航空関係のエンジニアとなること。現在は日本語学校での学習に注力しているが、日本の高校へ入学してから勉強し、大学進学を期待している。悩みは、深い話ができる友人が出来にくいくことと話す。

R・T：2年前の8月、リトアニアから一人で来ました。東大に行って、航空宇宙エンジニアになりたいという夢があります。東京のアパートで一人暮らしをしています。勉強も不十分です。JAXAに就職したい、そのためには大学の卒業証書が必要で、そのためには日本語力と学力が必要です。ウクライナでは義務教育11年間ですが、私は戦争のせいで私は9年生で止まっています。そのため、私はどうやって日本の学校に入学するのがよいのか、入学できるのかがわからなくて、、、。

いまは日本語学校に行っていますが、卒業したら、日本の高校に入りたいと考えています。新宿高

校か田柄高校に行きたいです。いま行っている日本語学校はYMCAに紹介してもらいました。日本の教育制度についても教えてもらうことができました。それまでの半年間は、居酒屋で働いていました。居酒屋で働いていたときはとても困難な状況にあり、いやな記憶もあります。けれどいまは、日本語学校に通い、まだかろうじてですが、進路が見えつつあります。



司会者：何歳ですか？

R・T：19歳です。

司会者：ということは、いま日本語を必死で勉強して、高校から入りなおして、夢の実現のために大学に進学していくということですね。

R・T：はいそうです。回り道しましたが、将来の夢とそのための道筋が明確になりました。明日も、明後日も、来月も、そのために私はがんばります。

私はウクライナでは800メートルと3000メートルのマラソンのチャンピオンでした。でもいまはコーチがいないので、ジョギングはしていません。

私は戦争前から日本にあこがれています。毎日私は友達を探しています。でも、日本人は私を「ウクライナに帰ってしまう人」と思うのです。そういうなかで友達になるのはとても難しいです。でも友達ができるようにがんばっています。ありがとうございました。

司会者：みなさん、大切なコメントをわかつ合ってくださいありがとうございました。

第2部

「応答：私たち日本社会が問われていること」 (パネルディスカッション)

＜登壇者＞

横山由利亞

公益財団法人日本YMCA同盟

ウクライナ避難者支援プロジェクト責任者

村田陽次

東京都生活文化スポーツ局

都民生活部地域活動推進課課長代理

小野一馬

NPO法人ビューティフル・ワールド理事

大分別府にて避難民受け入れ

大森佐和

国際基督教大学教員

横山) 第二部は『私たち日本社会が問われていること』というテーマでお送りします。

第一部で、この一年間の変化、アンケートからの現状報告、続いてお二人のリーダー的な避難者から昨年に引き続き提言をいただきました。その後、四人の背景の異なる方々から貴重なお話を聞かせていただきました。

第二部では、実際に支援活動に責任ある立場で関わる皆様や、リソースパーソンとしてバックアップされている方まで今日はいますので、「応答」という形で進めて行きます。

では、最初にそれぞれ自己紹介も兼ねて、携わっておられる活動について簡単にご報告をお願いします。村田さんお願いします。

村田) 皆さん改めまして、こんにちは。東京都の村田と言います。私たち東京都は、今日の主催者である日本YMCA同盟と一緒にポプトヌイクという事業をやっています。今、東京にウクライナから避難されている方が大体600人ぐらいいらっしゃいます。そうした方々の困っていること、いろんな悩み

を、横山さんを中心に聞き取っていただいて、それが解決に向かうように、例えば行政機関であるとか、いろんなNPO団体とか、そういうところにつなぐと言う事業です。また、こうした事業を通じて皆さんのお話を聞いて、私たち東京都というのは国の政府と区市町村、一番身近な自治体の間に位置する、ちょっと難しい言葉で言うと「広域自治体」というんですけども、日本で一番大きな自治体ですので、聞いた声をもとにして国、政府に意見を言う、そういう取り組みもしています。よろしくお願ひします。

横山) はい、村田さんありがとうございます。東京都からいろいろ出てくる意見が国を動かしていく力を持ってるっていうことですよね。頼りにします。では小野さんお願ひします。

小野) 皆さん、こんにちは。NPO法人ビューティフルワールドの小野といいます。

思えば20年前にウクライナ人、その後日本に帰化したんですが、ウクライナ人の妻と出会って20年間、ロシア、ウクライナ、ベラルーシのことを勉強して、気づけばウクライナ避難民支援をやっていました。

戦争が起った後、九州北部の福岡、長崎、大分別府で約50名のウクライナ避難民を受け入れました。現地ウクライナの支援も、発電機の支援等、やっています。もともと夫婦でやっている小さなNPOですので予算も少なく、、、本当に、避難民の方と壁をつくらず、受け入れた方を「親友」とか「新たな親戚」のような感じで受け入れています。時にはぶつかり合いながら、紆余曲折、やっているところです。よろしくお願ひします。

横山) ありがとうございます。これまで50名、ほぼ全員の身元保証人もされて、ウクライナから、特に危険な地帯から呼んでこられたすごいご夫婦です。

小野) はい、東部、南部、ハリキウ、スミイ、ザボリージヤ、ヘルソン、オデッサ、マリウポリ、ドネツク、このあたりからの方々です。

横山) その方々とほとんど寝食も共にし、自動車免許を取りに行くのも同行。生活のあらゆることを共にされている、という印象です。

では大森さん、お願ひします。

大森) 私は国際基督教大学、International Christian University (ICU) と言う大学の教員をしております、大森佐和と申します。基本的には日本YMCA同盟の側面支援という形で、東京都と日本YMCA同盟がやってるポプートヌイクという事業に携わっています。先ほど一部ご紹介のあったアンケート結果をもう少し詳しくお話をさせていただけたらと思います。よろしくお願ひします。

横山) もともとご専門は何ですか。

大森) 公共政策、そして開発学をICUでは教えています。自分の学位としては、政治学で学位を取っているものです。よろしくお願ひいたします。

横山) ありがとうございます。では早速ですけれども、この第1部ここまで印象に残ったことですね。中でも、今日、もう少し日本の私たちの間でこの機会に深めておいた方がいいと思ったことなど、小野さん、村田さんから一言いただきたいと思います。

昨年もありましたけれども、やはり東京都を中心とするこの都市部の今の傾向と、大分別府という地方部での今の傾向など、その違いも顕著になってきてることだと思います。これから「正念場の3年目」です。先程私たちのアンケートでは、不安は「住居を自分たちで費用を払って家を借りていくことができるか」、「仕事を得て安定的に収入が得られるか」ということがツートップでしたが、そのあたりをめぐる状況、支援者としての心構えなど、お二人からいただけたらと思います。

小野) 私ども地方部で、関東の皆さんと違うとしたら、先ほど横山さんがおっしゃられたとおり、運転免許の取得支援ですね。外国免許の切り替えというものを組織的に実施しました。

運転免許を取るだけだったら、ウクライナの免許証を日本の免許証に変えるのは比較的試験にパスすれば簡単にできるんですが、私たちは避難の長期化というところをしっかり見据えていましたから、運転免許の自動車学校にしっかり通ってもらい、日本の交通法規を守っていただくように教習をしてもらいました。大変でした。教習車の後ろに乗って、通訳をし、一時はどうなることかと本当に大変でした。でも、9人が運転免許を取り、そのうち5人は自分で自動車を買い、今ではブイブイ言わせて走ってるわけです。任意保険という概念もなかなか分かってくれませんから、私が自腹で毎月払ってるというところです。

それで、「三年目的心構え」というところなんですが、皆さん御承知のとおり、日本財団の支援が最終年となります。私たちが支援している方々でも、今の状況だとやはり自立できるのは半分ぐらいかなと思っています。なのでこの一年、私たちも腹をくくって支援をしないと、本当に一年後、日本財団の支援が終わった瞬間、「食っていけない」という状況は絶対につくりたくない。しかも「日本に残りたいのに、何も選択肢がなくて帰らなきゃいけない」、こういうのを私はつくりたくない。

日本に居たければ居れるだけ居てください。この環境をつくるのが私たち支援者の責務だと思います。この一年、しっかり私たちはそこを見据えて就労支援をしていきたい。

それで印象に残ったところと言えば、横山さんがおっしゃられた「職人・技術者」は、ウクライナの中流階級の技術者です。例えば私どもが支援している方で、置職人になった方、内装業をやられている方がいます。マリウポリで大手ゼネコン会社の部長だった方が工務店で働かれたりします。この方々は

皆さんもう3ヶ月ぐらい働けば社長の右腕になっています。小さい会社ですからね。

ただ、ひとつ問題なのは、ウクライナ式の働き方と日本式の働き方は全く違う。特に地方はこれが顕著で、雇用者が力を持っています。たとえば日本企業は半年ぐらい、試用期間みたいな形でその人の能力を見ます。欧米式とその人の能力がパンと最初にあって、そのタスクをボンと割り振られるわけです。でもウクライナの方々は、「私はこんなにスキルがあるのに、どうして日本の企業はタスクを渡してくれないのかか」というのをよく言われます。これが原因で辞めた人もいます。せっかくいい橋を作る設計会社に入ってスキルを活かせる可能性があったのに、です。彼はヘルソン出身なので、私はこの人を軸にヘルソンの橋を架ける復興事業をしようと思っていたのですが、辞めてしまったんです。日本企業の働き方とウクライナ企業の働き方が違ったから。でも能力はすごく高いんです。だからこの能力をしっかりと生かせる仕事を一年以内に支援者が見つけてあげる最大限の努力をしないといけない。そうでなければ、財政支援がなくなった途端に路頭に迷うことになりますから。

横山）私も最近聞くのは、働き方がやっぱり違う。先ほどもジョブ型雇用と言いましたけれども、ウクライナはその人の持っている専門性やスキル、いわゆるキャリアに対して給与、サラリーを出すという形ですが、日本人はまずその人柄とか人物をよく見る。3ヶ月間はまず何でもやってみて適性を見る。上司の言うことがかなり絶対で、その人にまず自分のやるべきことをお伺いをたて、その人の言うことに従う。特に地方では、そういう傾向は顕著で権限委譲はなかなかされないようですね。

東京でも、特に若い人がやはりジェネラリスト養成というようなところで、スペシャリストになれないのでないかという不安を抱えているとの相談を受けたことがあります。

では村田さんお願いします。

村田）私たちはこの一年、さきほどお話したポプトニクを通じて避難されている方々を色々なところにつなげるということをやってきました。

一年前も私はこの場でお話ししたんですが、ロシアの全面侵攻からまだ一年の段階だったので、避難されてる方々がまずは生活に不自由しないように色々な役所につないだり、お金だったりいろんな支援の制度につないだりしました。東京都は住宅を提供し、まずは生活に困らないようにというところで注力していました。

その後、一年間いろんなところにつなげる取り組みを継続し、最初に横山さんのレポートにもありましたが、今避難されてる方の中で生活にある程度満足されてる方も多い。良く言えば少し安定はしてるんですね。

ただ、その間も東京に避難されている、東京に住んでいる避難者の方は増えています。かつ単身の方、一人世帯の方が増えているというようなこともあります。東京には約600人の避難者がおられ、一人一人の状況がすごく見えづらくなっています。

その600人の中でも、先程、四人の方が前に出て話をされましたか、様々な状況があって、うまくいってる人もいればうまくいってない人もいる。何らかの障害にぶつかって、少しやり方を変えなきやいけなかったり、もう少し私たちのサポートが必要な場合もあります。

横山さんが「正念場の3年目」と表現されましたか、小野さんが言わされたように、日本財団の支援が三年と期限が区切られています。東京都が住宅提供している住宅も、あと一年は大丈夫です。次の四月からの一年間は東京都が提供している住宅はそのまま無償で住んでいただくことができます。

ただ、今お約束できるのが一年なんですね。ですので、これから三年目というところで、うまくいってる方々については、それをより後押しするように、うまくいってない、まだ軌道に乗ることができない方々については、横山さんたちと協力しながら、その人達が今後明るい見通しを持てるよう頑

張らなきゃいけないという、そういう状況にあると思います。

安心していたわけではないんですけども、確かに「少し安心・安定している」、「生活が安定した」という声も増えていました。なので、今日改めて、「もう一回、これから頑張らなきゃいけないな」というふうに思っているところです。

横山) 本当に、アンケートで東京都の都営住宅をはじめ、公営住宅がもう「第二の故郷」になっていることが伝わって来ます。

いわば、とるものもとりあえず来た人たちが、再び、ある日突然、今の家を出て行かないといけなくなる状況を考える、想像する。その心情を想像した時に、やはり私たちはもう少し長いタームで、とりあえず一年は何とか大丈夫ですけれども、その先ですね、どういう風な仕組みがいいのか。全員が、一律的にアパートが必要かどうか。無償である必要があるかどうかというようなことも含めて、負担率に傾斜をかけたり、仕組みのいろんなバリエーションを考えていけたらいいなど、私は心からそう思っています。

さっきAさんから、「もっと早く中学に行けばよかった」とのコメントがありましたが、中学までが義務教育でそこから高校に進学するということの重みを、私ももっと早く、来日時から、中学生であれば一年後でも二年後でも間もなく高校受験が控えていることをもっと意識すべきだったと思いました。

今日、避難者の教育サポートをしている団体、YSGグローバルスクールから平野成美さんが参加してくれています。まさに現場で外国ルーツの子ども達の日本語の学習、そして日本語で勉強ができるようになるための勉強をサポートして立場から、ぜひご発言をお願いしたいと思います。

平野) はい。NPO法人のYSGグローバルスクールという教室が東京都内に2か所あり、そこでウクライナから来られた避難民の方々も含めて外国ルーツの子

供たちに日本語だったり、教育支援をしている団体の平野と申します。

やはり私たちも横山さんと一緒にウクライナの方々を支援していく中で、日本が4月から新しい学校が始まり、ウクライナは9月から始まるという中で、多くの子ども達がウクライナのオンラインと日本語の学習、そして義務教育学齢の子たちは小学校や中学校にも通って、ダブルスクール、トリプルスクールという状態になっています。ウクライナではもう次の9月からは三年目の学年になります。

やはり子ども達の日本での生活が長くなってくると、どんどん気持ちが変わってきているとも思います。やはり日本語を平仮名から始めた子ども達は、差はありますが、日本語でお喋りができるようになって、勉強もちょっとずつできるようになって、自信がついてきてるっていう状況にあるので、日々考えていることが変化します。保護者もそれにどうにか応えよう、日本で進学するならばこれから三年間はどうにかこう日本にいられるようにしたい、その想いも伝わってきます。

ただ、それが日々変わっていくので、それをもとに私たちも「ウクライナに帰りたいよね」という気持ちを大事にしながらも、「でも日本で高校進学するならやはり日本語は大事。強化教育をしないと学校でついていけなくなってしまう。そうなると大変だよね」ということを説明する。「ウクライナに戻れたらこうだよね。でも日本にいるならこうしておいた方がいいよね」と。ただ、その負担を全部背負っているのは、ダブルスクールやトリプルスクールをしている子ども達自身です。

横山) 非常に深い話をありがとうございます。本当に10代の多感な子たちの日々の変化。やはり「ウクライナに帰りたい」、「帰れたら・・」という選択肢を希望として残しながらも、日本での次の備えを日本の指導者、支援者としては示していかないといけない。そういう支援者自身も、避難者と同様に両義的な葛藤があるというのを、いま、平野さんのお

話から、特に10代は難しいという、その変化もあって難しいということがわかりました。

私、グローバルスクールという学校を本当に尊敬しています。この学校に行きたいがために東京に移ってこられる、東京を希望される避難者の方もおられるぐらいです。お子さんをお預かりしていると、その親御さんの生活相談も先生には寄せられます。そこにはビザや就労の問題、これウクライナ人に限らずなんですかけども、こういう相談対応も結果的にボランティアで先生に求められるような現状も以前聞きました。

私たちは決してウクライナの支援だけということではなくて、このことを一つの風穴としてもっと外国ルーツの子ども達とその家族が、東京で、あるいは日本で生きやすい環境にしていかないといけない。そのための支援団体であったり、財源だったりを確保していくといふうに考えていることは、昨年も皆さんにお話したところです。平野さんありがとうございました。

今度は、中長期的な見通しが一つ立ったと言えば立ったということの中に、12月1日から補完的保護制度のスタートがあります。順調に申請が寄せられているということのようです。

東京で、「もう既に申請して5年間のビザをもらったよ」という方おられますか。数名いらっしゃいますね。おめでとうございます。やはり地方の方が件数が少ないので早いようです。別府あたりからだいぶ前に聞いたんですが、やっと東京入管でもおりようになってきたということだと思います。一方で、定住支援プログラムの日本語教育と、生活オリエンテーションの申し込みはまだあまり進んでいないと聞いています。

この定住支援プログラムというのは、4月からスタートするということですが、皆さん日本に来て2年目の方、既に仕事をしてたり、学校に行っていたりがあって、まだ申し込むべきか申し込まない方がいいのか、先ほどあったように財的な援助も含めて

よくわからないので見合せよう、といったようなことを私は聞いています。この補完的保護制度についてそれぞれ皆さんから評価されている点とか、少しお伺いしたいというふうに思います。

まず、大森さんは今回のアンケートについて調査の段階から御協力をいたいたんですが。ちょっと画面を出してもらえますか。

大森) はい。その定住支援プログラムについて、大まかにどの程度わかっているのかっていう質問の後に、それぞれの定住支援プログラムの中の細かい支援プログラム、例えば日本語教育ですか、生活ガイダンスと言われるような日本文化の理解とかについての説明、そして生活援助金があります。こうした、日本語教育を受けたり、定住支援プログラムの中で援助金が出てくるということ、それからそこにに関して得られる住居費、そしてその一方で、こういう定住支援プログラムを受けていると、今度はいま日本財団から受けているような財政支援が受けられない、2重にはもらえないということの関係性の話について質問をしました。

そうしますと、本當ですと定住支援プログラムの中に一個一個入っていることですので、同じ理解度を示しているというのが本当に理解しているということだと思うんですが、やはり理解に非常にばらつきがあるということがわかりました。（次頁上図）

これは年齢によってどの程度それぞれの各項目を理解してますかと聞いたものです。そして、一番左の青いのが定住支援プログラム全体、その後のいろんな色をしているのがそれ各自々のところで、どのくらいわかりますかとの質問への回答です。

先程の全体であったように、日本語教育というのは大きく理解が進んでいるところだと思いますが、やはりその後の個々の生活ガイダンスやその他の援助金等と住居費等々に関しては、年代を問わず理解度が低い傾向があります。その意味では、「すべてわかっている」とならないと、なかなか日本の私たちが聞いてもわかりにくいので、「よくわかっていない」というふうに思いました。

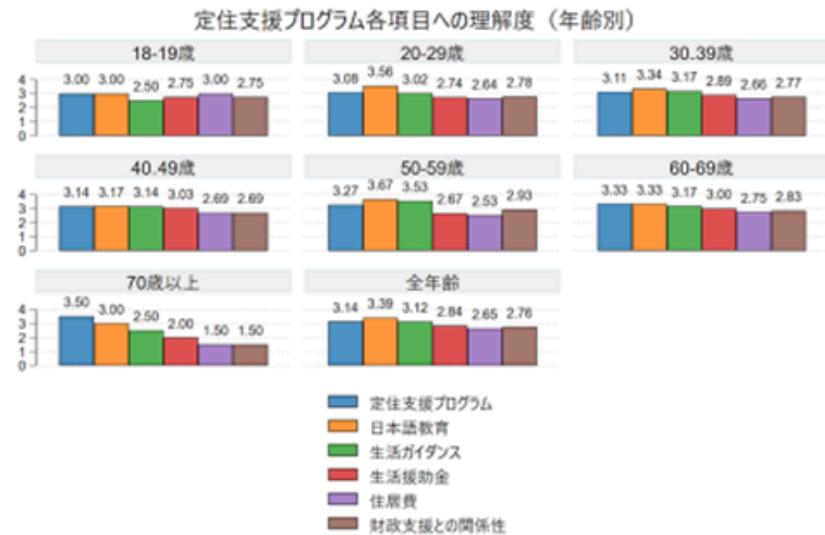
定住支援プログラムの内容についての理解度はまちまち

本来なら定住支援プログラムの内容が同程度に理解されてもよいが、

項目ごとの理解度は年代を問わずばらつきがある。

生活援助金や住居費への理解はまだ低めであるといえる。

よくわかると答える人が54-26%と項目によってばらつきが大きい。



るよ」というふうに答えた人しかわからないんだと思います。

ですので「少し聞いたことがある」とか、その程度ではなかなか理解が進まない。それを考ると、やはり「本当にわかっている」と答えてくださった方は、日本語で50%ぐらいですし、その他の項目ですと25~30%ぐらいです。70%ぐらいの人たちはこれから、このプログラムがどういうことなのかということをちゃんと理解して、選択していく必要がある、ということになるのかなと思っています。

まだ始まったばかりの制度ですので、理解度には差があって当たり前です。むしろ全員の方がよくわかるよっていう答えになるくらい、よくよく支援を進める側も、そして皆さんの方もでちゃんとわかっていく努力をしていく必要があるだろうというふうに思っています。

横山) ありがとうございます。

去年、弁護士のウリバチョバ・イリーナさんから単年度のビザでは中長期的なプランが立てられないでの、ビザはもう少し中長期的なもので考えてほしいとの意見提示がありました。その中で、一年経つて五年というのは非常に喜ばしいことかなと思いま

す。一方で、このセット化されている定住支援プログラム、先程冒頭でも申し上げましたように、わずか半年のプログラムで自立して安定した生活を日本で送ることはできるようになるのかとの疑問もあります。類似の、近いプログラムを実際に受けたアフガニスタンの方々などの前例を見ていると、本当に就労された方はごくごく一部、というようなことで、御苦労されているのを見聞きしています。

このあたりのことを考えると、村田さんにお伺いしたいんですが、国としては、このビザと定住支援プログラムをもって一つ自立の支援策としてるわけなんですが、実際しかしそれをもっても難しい。先ほどもあったように、差が出てくる。あるいはこういった制度自体が十分に理解できなくて、利用しない人もいるかもしれない。そういう中で最終的に、たとえば自治体などがセーフティーネットの役割を果たすことになるのか、果たせるのか。そのあたりについて私見でも結構ですが、ご意見いただけますか。

村田) はい、ありがとうございます。

今補完的保護制度っていう新しい制度が入って、最長五年のビザが出るということで、皆さんに少し

長い期間安定して日本に住んでいただけたという制度が導入されたことは確かです。が、横山さんの話にありましたように、その中でいわゆる日本で生活していくための最初のステップとなる支援が十分かというと、どうもいろいろ話を聞いてみると十分でないかもしれませんということが一つあります。だから、そこはそういう観点から私たちも意見をしていかなきゃいけないということがあります。

それとあわせて、ウクライナの皆さんだけでなくて、という話がありましたけれども、たとえば今までも戦火を逃れたり、戦争を逃れたり、あるいは政治的な迫害を受けたりして日本に来られているいわゆる難民の方々というのはいらっしゃったんですね。そうした方々に対する支援というのがこの定住支援プログラムのもとになっているのですが、ただ、そもそもそれが十分だったのかというところがあります。

そういう難民の方々、難民じゃなくて自分の意思で日本に来た場合でも、例えば仕事をするために日本に来ました。でも、そのご家族は日本語について何も教育を受けていなかったので、日本に住んでからやはり学ばなければいけないとか、いろんな困難に直面する方はいらっしゃるんですね。ですので、そうした方々を適切な支援につなげていくというのは、本当はこれまでやらなきゃいなかつたんです。

ただ、そこがどうしても私たち行政は、今まで十分じゃなかつたところがあります。去年も似たような話をしましたけど、皆さんが日本でこれから不自由なく暮らしていくように、ちゃんとした、教育であれ仕事の機会であれ、そういうことにつないでいくと。それを通じて、隙間を埋めていく。隙間に落ちて、さっき小野さんが日本財団の支援が切れるというところで、そこでもう何もなくなってしまうという可能性があるという話をされましたけども、日本財団の支援が切れるとしても、例えば外国人じゃなくて、日本人でも外国人でも分け隔てなく受けられる支援というのも実はあるんですね。ただ、そういうところにつないでいくということについて

て、例えば区市町村であるとか、私たち都道府県を始め行政自体がつなぐためのいろんな仕組みだとか知識だと取り組みだとが足りなかつたところがあります。だから、そこをもっと頑張っていく。そのことが、何か一つだけ絶対的なセーフティーネットがあるという話ではなくて、そういう皆さんのが住みやすい、外国人であれば誰にとっても住みやすいという仕組みをつくっていくのが大事かなと思っています。

横山) 精一杯答えていただいてありがとうございます。今、大森さんが「たとえばそれは生活保護とかでどうか」と言われたんですけど、それは必ずしも生活保護だけでなく、私の知ってる限り一人親手当であつたり、区によっては小学校に上がるときに進学一時金があつたりとか、いろんな仕組みがあると思います。ただ、そういうことを知らない、あるいは積極的に外国の方々に知らせる努力がなされてないとか、そういうことも含まれるということですね。

村田) そうですね。今、ちょっと私の話に具体的な話が少なかつたので横山さんに足してもらったんですけども、日本人でももちろん就職をして収入を得て自立していく、あるいはいろんな支援金みたいなのを得て自立して何らかの活動をしてっていうのが、それは日本人であれ外国人であれ基本です。

ただ、日本人であつても何らかの事情で働けなかつたような場合には、働けないあるいは収入を何らかの形で絶たれてしまったというような場合には、今お話しにあつたような生活保護だと、いろんな給付金のような制度があります。それを外国人にも分け隔てなく使っていくと。本当は使えるのに、例えば役所の職員が知らなかつたとか、そういうふうにつなぐっていう意識が低かったとか、そういうことは今まであったんですね。だからそこを変えていかなきゃいけない。それがセーフティーネットだというふうに私は考えています。

横山) ありがとうございます。はい、私たちの意識の問題というか、もちろん行政も含めてということで。非常に大切なご意見ありがとうございました。

小野さん、今、行政によるセーフティネットの話があったんですが、今度はもう少し、楽しく生きる、人間らしく生きるということの中には、文化的なことであったり、場合によってはレジャー的なことだったり、いろんな要素、そして友達作り、日本人の友達を通して日本を知る、というようなことがあるというお話だったと思うんですけど、そのあたりで別府で心がけておられることとか、家族同然みたいなことの中で、何かヒントがあればお願ひいたします。

小野) まず、先ほどからおっしゃられている政府の支援プログラム。これを私たちは精査した結果、「原則、受けない」ということを決定しました。皆さんがおっしゃられている日本語教育ですが、私たちは独自にやるということで、週に2回やるようにしています。これ、サバイバル日本語講座という名前で、実は三週間前から始めていて、とにかく日本語会話に特化した、文法等あまり関係なく喋ることに特化した日本語講座を始めています。

あと地方部の問題として、たとえば農家の後継者不足があります。土地が余っているんです。

避難者の皆さん、"ダーチャ"で土いじりが好きですよね。なのでやっぱり別府とか大分とか、福岡、長崎とかに避難している方々は、土地がいっぱいありますから、余っていますから、ここで葡萄を作りたい、カルトーシカ（じゃがいも）を作りたい、ブリヤークを作りたい、というのがあるわけです。

町からちょっと車で行ったところにはもう田舎がいっぱいあります。空き家があります。ここにウクライナ人の土地を作ろうと思っています。私が買って、とりあえずウクライナ人が自由に土いじりできるところを作ろうと思っています。これを今年中に始められるように、すでに農家の方とは話をしてますから。先ほども申し上げたウクライナ人の中流階

層の知識とか、そういう知識や技術を使ってウクライナ式ハイブリッド農業をやろうと考えています。

横山) それで別府産のウクライナワインを作って、ブランド化するっていうお話ですよね。

小野) そう。大分県産のウクライナワインを作ろうと思います。甘くておいしい。

横山) 拍手起きましたよ。今のお話にうなずいておられるフロアの避難民の方が多くいらっしゃいますね。

小野) 関東の方は、教会としてニコライ堂があります。チェリコフ・チャーチがあります。でも、西日本になると正教系の教会はほとんどないんです。なのでこの空き家を改装して、受入れた避難民の内装業者の方の力も借りて、最終的には教会を作ろうと思います。そうすれば、日本財団が終わっても食と住、信仰を守る土地ができます。

村田) 文化的な話といえば、去年ここで話した時に、避難生活が長くなってくるので、例えば美術館とか博物館にみんなで行ける機会を増やしたいとか、文化的な取り組みを増やしたいという話をしました。それで、実際東京にある美術館とか劇場とか、あとプラネタリウムもそうですね、ウクライナ関係のプログラムというのが少しづつ増えています。すごくいいことだと思います。

それと、スポーツで去年の12月に、シャフタル・ドネツクというウクライナのチームが来日して多くのお客さんに、日本人にサッカーを見てもらつた。あと、東京にFC東京というサッカーのチームがあるのですが、このチームが避難者の皆さん、ウクライナから避難された皆さんを年に何回か試合に招待しています。

それでうれしかったのが、去年の秋に避難されている方々と一緒に招待されて試合を見に行った時に、もう2回目とか3回目見に来た人がいるので、一

一緒に東京のチームを応援してくれるんですよね。東京に住んでるウクライナの皆さんが東京のチームを応援してくれるっていうのは、私たちにとってもすごく嬉しいことです。この中にももしかしたらこられた方いるかもしれませんけども。でも残念ながら3回招待試合があってまだ一回も勝ってないっていうのが非常に残念なので、次は勝てという風に伝えてあるんですが。

私が見るのは主に東京ですけれども、日本の文化的な色んな活動の中で、ウクライナの存在が増えてきてるっていうのはすごくいいことですし、そういうことがみんなで笑ってこれからもやれる大きな力になるんじゃないかと思います。

横山) 別府と東京ということの中でウクライナ・日本ハイブリッドカルチャー、ハイブリッドアグリカルチャー、いいなという風に聞かせていただきました。

では、もう一度大森さんのパワーポイントを出していただけますか。

今日私が冒頭で、非常に満足度が高まっているけれども、同時に非常に不安度も大きいというお話をさせていただきました。皆さん、非常にその真反対の気持ち、葛藤を抱えて日々生活をされているということで、休憩時間に「本当にそうだ」と共感をし

て来てくださった方もおられました。このテンション、緊張感、不安を少しでも軽減するためにどうしたら良いか。アンケートのクロス集計等から読み解いたことを大森さんからちょっとお話をいただけたらと思います。お願ひします。

大森) はい。これは統計分析をしたものです。皆さんの満足度が前より高いというふうに答える方が増えた訳ですけれども、何が要因として高くなっているのかっていうことです。（下図）

日本語のこれがすごく面白かったんですけど、元々日本語ができる人の満足度が高いわけじゃないんですね。日本語のレベルがもっと伸びた人、たくさん伸びた人っていうのが、日本の生活にとても満足をしているという結果が示されました。来た時のレベルでもない。そして今のレベルでもない。どんどん伸びてる人がより満足をしているということが分かります。

それと、よりお年を召されている年代の方たちは日本の生活にとても満足をされているということが分かります。それから、補完的プログラム、そして様々な種類の定住支援プログラムに対しての知識をより持つことができている人たちというのは、より満足をしていることがあります。ですので、やはり日本でのいろいろなプログラムに対する理解

ウクライナ避難民の日本への満足度と将来への不安の要因（重回帰分析）		
	(1) 日本への満足度	(2) 将来への不安
日本人の知り合い・友人がいる	0.089 (0.098)	-0.276** (0.107)
日本語レベルの上達度合い	0.097** (0.048)	-0.027 (0.053)
フルタイムの仕事をしている	0.039 (0.126)	-0.256* (0.138)
パートタイムの仕事をしている	-0.017 (0.099)	0.073 (0.108)
補完的保護	0.135** (0.062)	0.061 (0.068)
定住支援プログラム理解	0.122* (0.071)	-0.058 (0.077)
家族がウクライナにいる	0.130 (0.095)	-0.071 (0.104)
男性	0.243** (0.117)	-0.026** (0.129)
年令(10代-70代)	0.082** (0.035)	0.024 (0.039)
定数	2.337*** (0.271)	33.809*** (0.295)
No. of observations	145 n 16	145 n 16
Adj. R-squared		

を深めていくということと、それから日本語教育を皆さんのが受けてどんどん上達をしていくところで、頑張って日本のこと学んでいこうと思っている方たちの満足度が非常に高いことがわかります。

その一方で、将来の不安というものがもちろん。皆さん戦争で、突然その生活が切り取られて日本に来ておられるわけで、そしてまだその戦争が長期化していると、ロシアの軍事侵攻によってですね。皆さんの気持ちがなかなか帰りたくたって帰れない、日本の滞在の長期化を考えざるを得ないという中の不安を抱えておられるわけですね。

それでは何が不安を抱えている原因になっているのか、その不安の要因を下げていくもの、少しでもその不安を和らげていくものが何なのかということわかったことが、やはり仕事ですね。特にフルタイムの職に就いてらっしゃる方というのは、生活の見通しが立ちますから、非常に不安がやわらぐということがわかります。これが残念ながらパートタイムとか職探しの人たちにはこういう傾向は見られません。ですので、本当にフルタイムの職についていくような生活の将来が見通せる安定ということが何よりも大切だということがわかります。

それからあと、もう一つ非常に面白いのが、日本に知り合いや友達がいると言う人、これは相談がで

きる程度の友達かとか、話ができる程度の友達かにかかわらず、まずは日本に知り合いがいてお友達がいるんだというそのことが、日本での生活の将来の不安を和らげるということがわかりました。（下図）

ですので、日本のコミュニティの皆さんにとって、やはりウクライナの方たちと友人になっていただくことがとても大切だということがわかりますし、そしてウクライナの人たちもぜひ、日本でお友達をつくっていただきたいと。そういう双方の働きかけがとても大切なことで、求められているということがわかりました。

両義的な気持ちというのは変わりませんけれども、少しでもお互いに暮らしが、不安が和らいで、そして満足感が得られるという仕組みを日本側もどう作っていくか、そして皆さんの方もそういう生活を少しでもしていっていただくということが大切だということがわかります。

横山) まとめの最後の時間になりますけれども、あとお一言ずつ、次の一年、私たちにとっても正念場の一年に向けて、最後にお一言づついただけますでしょうか。

小野) 是非とも皆さん、このウクライナ避難民支援

統計分析の結果から見えること

<日本への満足度を高める要因は>

- + 日本語のレベルが上達している人（来日時と現在の日本語レベルとを比較してより伸びている人）

+ 男性 ↑

+ 年代 ↑

- + 補完的保護をより知っている、定住支援プログラムをより理解している

<将来への不安に影響を与える要因は?>

+ フルタイムの仕事についている人 ↓

+ 日本人の友人や知り合いがいる ↓

+ 男性 ↓

というものを、ぜひとも政府に成功事例として示して行きましょう。私が支援してるところは絶対に成功させる、この心つもりでやっています。東京の皆さんも横山さんと一緒にぜひ成功事例として、「ああ、あの時ウクライナ避難民受け入れてよかったです」と言ってもらえるようにしましょう。

冒頭に申し上げました通り、私は腹をくくりました。私の財産、不動産全部処分して、このウクライナ人ランドに費やすつもりで（笑）戦争が終われば、ウクライナ復興支援に当然行きますから。私の一生はウクライナとともに、スラーヴァ・ウクライナ。ありがとうございます。

村田）すごいですね。小野さんのようにすごい人はたくさんいないかもしれません。私はとてもかないません。また、さきほどから支援縮小の可能性のお話などもいたしました。皆さんの不安は大きいと思います。

ただ、私たちは、例えば都営住宅はこの後一年以上提供を続けるという話もしましたし、横山さんたちと一緒にやってるポプートニクの取り組みも、この4月からまた一年続けることになっております。

今、いろんな報道が聞こえています。日本にも、正直いろんな意見があります。ただ、間違いなく覚

もそうです。皆さんを支援したい、皆さんを後押ししたい、ウクライナを応援したいという人は、この二年間で確実に増えています。そういう人たちを私たちも少しでも多く増やして巻き込んで、一緒に支えて頑張っていきたいと思いますので、ぜひこれからもよろしくお願ひいたします。

横山）大森さんお願いします。

大森）一番最初のポイントで書いてあることなんですけれども、ウクライナ人の皆さんにというよりは、この課題にかかわっていく国の人たち、そして都の人たち、市町村の人たちへのお願いということで言えば、やはり支援が減っていく3年目になります。

率直にそのことを、皆さんの不安が増えてしまうかもしれない、そのことも含めてでも、率直にそういう現状をお伝えしていく必要があると思います。今はもらえてる支援がずっと続くわけじゃないということになるべく早い段階でお伝えしないと、やはり皆さんのが生活を立てていこうとする真剣度というのも全然変わると思います。

ですから、ウクライナの方たちにお伝えしたいのはやはりこの一年、皆さんにとって大切な一年とな

今後に向けて

- + 将来への不安を軽減するために情報を予測可能なように透明性をもって伝えてゆく（支援縮小などのマイナスな見込みの情報を含めて伝えてゆく方が将来の見通しが立てやすい）
- + 日本語学習上達の機会をより提供することは日本での満足度を高めるために重要
- + さまざまな知識を日本で得られるような人は、日本での生活に満足している
- + 不安を軽くするために、安定した就労（フルタイムの仕事）は重要
- + 日本の友人や知り合いがいることは不安を有意に減らすので、つながりの形成が大切

えてお

いていただきたいのは、私もそうですし、横山さん

ります

から、どうぞ将来の設計に向けて最大限できること

を一日一日、精一杯生きていただきたいということですね。それは本当に大切なことだと思うんですね。そのためのお手伝い、それが一日でも日本の生活の安定につなげていけるようなお手伝いをしたいという人たちはたくさんいます。どうぞそういうふな努力をウクライナの人たちがしていけるように、行政の方たちは責任を持って、減る支援も含めて、ちゃんと透明性を持って開示していただきたいと思います。以上です。

横山) 力強いエールと、進言という感じで、避難者と支援者の両方にメッセージをいただきました。

横山) 私からは、ニュースはやっぱりガザであったり、能登半島地震であったりということの中で、だんだんウクライナ、特にウクライナの避難者の方々が今どうしてなのかというニュースが本当に減ってきています。

今日、そういう中でもたくさんのメディアの方、日本人の時にはもうほとんどないですが皆さん大事なメッセージは聞いて帰られたと思うんですけれども、メディアの方で良心的にウクライナの避難者の方が今どうされてるかというふうに追っておられる方もおられます。皆さん、もう忘れられたんじゃないかなって心配する必要はないですし、そうならなないように私たちも声を上げていきます。

同時にびっくりするのが、お正月にウクライナの方々から能登半島に募金をしたいという声をLINEでいただきました。今、さっき大森さんから本当に何て言うか厳しいエールがありましたけれども、災害であっても戦争であっても予想できないことで、人生が変わってしまった人たちが新しいスタートをして、自分の足で歩んでいく。一人ぼっちで責任を背負うんじゃないなくて、みんなのネットワークの中で一緒に助け合ってやっていく。そのことは災害でも大戦争でも関係ないですし、ガザでもウクライナでも関係ない。そのことの意味を、私はウクライナの方々から逆に教わっています。日本の人たちは皆さ

んから学ぶこともたくさんあるので、皆さんの体験もこれからもぜひ聞かせてほしいです。

私は上から支援するのではなくて、「皆さんから教えていただく」、「友達にならせてください」という思いで、これからも支援を続けていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひをいたします。

はい。ありがとうございました。

では、パネルディスカッションに協力していただいた小野さん、そして村田さん、大森さん、本当にありがとうございました。